

Newsletter 30

日本比較文学会中部支部 2023 年春号

巻頭言 日本比較文学会第 53 回中部大会シンポジウム報告

「日中の労働と娯楽にみる戦中戦後の連続性 ——歌い、踊る身体を通して」

司会・パネリスト 星野 幸代(名古屋大学)

パネリスト 河西 秀哉(名古屋大学)

パネリスト 大濱 慶子(神戸学院大学)

本シンポジウムでは、戦時下の国民動員から戦後勤労者の心身の健康へと目的を引き継いだ娯楽のうち、特に身体のリズムを伴う歌と舞踊を対象とし、日中関係を中心に国際状況を意識しつつ、戦中戦後の連続性と変質について議論した。日本の総力戦体制においては、兵士の予備軍、銃後の労働者および母体たる人的資源を養成し、健康に保つとともにその情操を陶冶して人的資質を向上させることが目指された。この目的のもと、厚生省、日本厚生協会、産業報国会によって組織的に、宣伝啓発の効果を含む様々な娯楽(読書、展覧、音楽、舞台芸術など)が「厚生運動」として奨励されたいっぽう、それに適合しない娯楽は禁止された。このとき整えられた娯楽普及の諸制度は終戦によって一旦断絶し、関係者の多くは戦中の記憶を封印した。しかし習慣化し、潜伏した娯楽は、文化国家を掲げる戦後日本で蘇り、指導者たちも戦前からそのままシフトしたケースが多い。

河西秀哉氏は、著書『うたごえの戦後史』(2016)及び近年の研究に基づき、「一緒に歌うこと、そして身体を動かすこと—戦後日本における合唱と労働者」と題して報告した。上述の厚生運動の一環として多くの職場に合唱団が作られ、愛国歌等を通じて労働者に「健全」な娯楽を提供し、ある程度戦意高揚の効果を見た。敗戦後、共産党を中心とした左翼の文化人たちによって「うたごえ」運動が生まれる。それは、平和の唱道や体制批判をねらう運動である一方、職場のレクリエーションの

役割もあり、人間関係の触媒という意味を強く担っており、音楽になじみのない多くの労働者を取り込むため、簡単な振付との連動といった工夫が施された。戦前戦後、異なる目的のもとで奨励された合唱は、いずれも身体の動きを伴っており、それが普及のために重要な要素であった。

大濱慶子氏は 2022 年の主編著『中国の娯楽とジェンダー』への寄稿「戦後再生される社交ダンス」の議論を進め、「戦後日中のペアダンスの流行からみた労働者の娯楽と身体—社交ダンス・フォークダンス・集団舞」と題して報告を行った。社交ダンスは近代日本・中国においてダンスホールの隆盛を背景に普及し、主に都市中間階級の男性の娯楽として発展した。当時は風紀を乱す夜の娯楽とされ、1940 年代以降は取締りの対象となった。戦後のペアダンスはそれとは対照的に、「男女平等」を体現する明るいダンスとして再生し、議事堂、公園、工場、学校、公民館、農村や漁村に至るまで、戦前とは異なる社会層や職業の人々も踊るようになった。日中両国は政治的には公式な交流が無かったにもかかわらず、共時的なダンスの流行という社会現象が起きていたことが諸資料から浮かび上がる。異性愛規範を補強するペアダンスに対して、中国では階級、世代など多様な差異を包含する「平等」な団体舞踊の奨励が徹底されていった。異性愛規範を補強するペアダンスに対して、中国では階級、世代など多様な差異を包含する「平等」な団体舞踊の奨励が徹底されていった。

星野幸代は近著『翼賛体制下のモダンダンス』(2022)を踏まえて、「戦後日中バレエの分岐と交流——中国映画「白毛女」のアダプテーションを中心に」と題して報告した。日中戦争期、日本のバレエとモダンダンスは、舞踊家の日本留学や、駐留軍への慰問公演などを通じて中国に少なからず影響を与えた。人民共和国建国後の中国では国家主導のもと、また戦後日本では民間で、バレエ教育が急激に発達する。それを支えたのは戦時期厚生運動のもとで体育、舞踊を鍛錬された世代であった。同時期、日中の国交がない中で、農民への搾取とその救済を描く中国の歌劇映画「白毛女」が、左翼系労働団体を通じて公民館、学校などで上映されて人気を博し、さらにバレエ「白毛女」を松山バレエ団が創作した。「白毛女」の物語は、GHQ 占領から解放された日本人が主権を取り戻すストーリーに重なり、また全国勤労者音楽協議会(通称「労音」)に支えられたバレエ「白毛女」の上演は、教養主義の時代に労働者の芸術への渴望を満たしたと言える。また、松山バレエ団が「白毛女」を初めて黙劇であるバレエとしてアダプテーションし、それが中国に逆輸入されて文化大革命の模範劇に多大な影響を与えたことは、再認識されても良いだろう。

戦時体制の終結を以て国家体制が一転したという見方は歴史学の分野では 20 世紀末に解体されたものの、その後も身体芸術研究の分野では戦時について語らず、或いは昔語りにして戦後から切り離す傾向が主流であった。本シンポジウムの議論により、戦後の「うたごえ」運動、ペアダンスのブーム、「バレエ流行り」は、いずれも音楽／歌と身体運動を連動させた戦時動員のための娯楽習慣を基盤としていたことが明らかになった。

日本比較文学会 第54回中部大会のご案内

日時：2023年5月27日(土)

場所：中京大学名古屋キャンパス16号館アネックス棟
6階コンベンション・ホール

会場となる「16号館アネックス棟」は、以下の地図(URL)の⑩になります。
<https://www.chukyo-u.ac.jp/information/facility/g1.html>

11:30-12:50 幹事会 (アネックス棟6階1661教室)

大会進行 杉浦 清文(中京大学)

13:00 開会の辞：星野 幸代(名古屋大学)

13:10-13:45 研究発表(発表25分、質疑応答10分)

「太平洋戦争をいかに表象するか」
「国民映画」としての『ゴジラ』(1954)

発表：森 有礼(中京大学)

司会：小松 史生子(金城学院大学)

13:45 休憩 (15分)

14:00-16:30 シンポジウム

「ウィリアム・フォークナーの日本訪問余滴
——冷戦期文化外交と日本人作家」

司会：森 有礼(中京大学)

14:00 趣旨説明

14:15-15:45 (各話題30分)

1. 「フォークナー訪日の足跡と意義
——何が彼に求められていたのか」
森 有礼(中京大学)

2. 「私的・文学的戦後日米関係批判
安岡章太郎『アメリカ感情旅行』を読む」
金澤 哲(京都女子大学)

3. 「大江健三郎の「飼育」をめぐる」
相田 洋明(大阪公立大学)

15:45 休憩 (10分)

15:55 シンポジウム 質疑・議論(35分)

16:30 閉会の辞：香ノ木 隆臣(愛知学院大学)

16:35 総会 司会：杉浦 清文(中京大学)

第 54 回中部大会 シンポジウム

ウィリアム・フォークナーの日本訪問余滴 —冷戦期文化外交と日本人作家

司会・パネリスト 森 有礼(中京大学)
パネリスト 金澤 哲(京都女子大学)
パネリスト 相田 洋明(大阪公立大学)

趣旨説明

ノーベル賞作家であるウィリアム・フォークナーは、1955 年の 8 月に米国国務省の文化使節として日本を訪問し、およそ三週間の滞在で、東京、京都、長野で日本の作家、文化人、ジャーナリスト、そして一般市民と多くの交流を持った。戦後復興の只中にあった日本にとって、彼の訪問は多岐に亘って大きな影響を与えるとともに、東西冷戦下における米国の文化外交という観点からもその意義は極めて重大ではあるが、奇妙なことにその検証は日米のフォークナー研究者の間でもほとんど行われてこなかった。2022 年に刊行された『ウィリアム・フォークナーの日本訪問—冷戦と文学のポリティクス』は、フォークナーの訪日について日本で刊行された恐らくは初めての研究書であり、今回のパネリスト三名も同書の執筆に関わっている。本シンポジウムは、フォークナーが果たした文化外交使節としての役割について、上掲書に基づいて概括するとともに、フォークナーの訪日が日本の社会、そして何よりその作家たちに残した大きな余波について確認してゆきたい。

フォークナー訪日の足跡と意義—何が彼に求められていたのか

森 有礼

1955(昭和 30)年のフォークナー訪日は、当時大きなニュースとして扱われた。その滞在期間中にこの作家が行った対談やインタビューは、翌年に研究社から *Faulkner at Nagano* (『長野のフォークナー』)として出版されており、日本におけるそのインパクトは看過できないものがある。一方で現在同書や、それに関連してフォークナーが残した日本滞在記「日本の印象」やエッセイ「日本の若者達へ」、及

びフォークナーと交流した人々の記録を読むと、彼の訪日に込められた米国の政治的意図とともに、日本がフォークナーに抱いていた様々な期待と幻想とが透けて見えてくる。

本発表は、『ウィリアム・フォークナーの日本訪問—冷戦と文学のポリティクス』を、特撮映画『ゴジラ』(1954)と併せて紹介する形でこうした政治的意図や期待、そして幻想について確認するとともに、特に日本におけるこうした幻想の核を成す、一種の政治的・文化的不在の中心としての「国体」について考察したい。

私的・文学的戦後日米関係批判 安岡章太郎『アメリカ感情旅行』を読む

金澤 哲

フォークナーの日本訪問は、冷戦下においてアメリカへの好感度を上げるべく実施された文化外交政策のひとつであった。同様の趣旨で日本の作家・批評家をアメリカに留学させたのが、「ロックフェラー財団創作フェロー」プログラムである。このプログラムによって、福田恆存(1953)から江藤淳(1962)まで、7人の作家がアメリカに留学した。その中から、本発表では1960年から61年にかけて留学した安岡章太郎に焦点を当て、おもに『アメリカ感情旅行』における日米関係批判について考察する。

そもそも留学に乗り気ではなかった安岡は、逡巡の末に、当時日本から訪れるものの少なかった南部を留学先に選んだ。そのきっかけはフォークナーの日本での発言であり、安岡の留学はいわばフォークナーの発言を实地に確かめに行った趣を持っている。

より大きな文脈で言えば、安岡の留学体験記は、私的あるいは個人的な体験によって「公式」の日米関係を批判／解体しているように思われる。安岡の文章を精読し、戦後日本文学に内在する批判的政治性を確認したい。

大江健三郎の「飼育」をめぐって

相田 洋明

大江健三郎の「飼育」(1958)を含む初期作品に、ガスカールやサルトルといったフランス文学の影響があることはつとに指摘されてきた。この発表ではさらにそのサルトルが論じた影響を受けたアメリカ人作家ウィリアム・フォークナーとの比較を試みたい。

大江はそのキャリアを通してフォークナーにくり返し言及しているが、言及する作品は「野生の棕櫚」やスノープス物語が主であり、フォークナーのヨクナパトーファ・サーガの中心的な作品である『響きと怒り』、『アブサロム、アブサロム!』等への言及はほとんどない。

この言及の漏れには二つの要因が考えられる。第一に影響の不安である。大江の「森に囲まれた谷間の村」(共同体)と中央(国家)の緊張関係を基軸にすえた作品構造はフォークナーのヨクナパトーファ・サーガと著しい類似性をもつ。第二に1950年代の日本の知識人層におけるアメリカ文学の位置である。占領後初期の日本において、アメリカの文化的支配への抵抗のひとつの現れとしてアメリカ文学の影響の否認ということがあったのではないか。1955年のフォークナー訪日とそれに対する日本側の幅広い応答を含めて検討したい。

第 54 回中部大会研究発表要旨

太平洋戦争をいかに表象するか:「国民映画」としての『ゴジラ』(1954)

森 有礼(中京大学)

太平洋戦争の記憶と経験をどのように表象するかという問題は、戦後の日本にとっては大きな課題であり、GHQ による占領下においてすら、多くの作家や映画人がこれらを形にしようと試みてきた。例えば占領統治終了直後に公開された映画『原爆の子』(1952)や『ひろしま』(1953)は日本国民が被った核の悲惨な影響を描いた初期の作品であり、強い反核メッセージと戦争に対する反省が込められている。一方、第五福竜丸被曝事件を背景として製作された『ゴジラ』(1954)は、空襲と原爆の記憶を行きつ戻りつ、それらを「水爆怪獣」として実体化し再演してみせる。それは「この間の戦争」の再来に対する危惧と不安と同時に、その戦争を総体として日本国民がどのように理解するかということ問いかけているように思える。本発表は、『ゴジラ』を「原爆と空襲」という太平洋戦争の表象を確立した作品として捉え、それが本作を「国民映画」足らしめた意義について考察したい。

支部長便り

星野 幸代

2024 年の全国大会は中部地区で開催することになりました。前回、中部地区で大会が行われたのは 2013 年で、会場は名古屋大学、あいにくの大雨でしたが、熱い議論と和気藹々とした懇親会が思い出されます。来たる 2023 年 6 月に東京外国語大学で行われる大会より、二年ぶりに対面方式に戻りますので、来年も対面開催が予想されます。中部支部会員の皆様、研究発表に是非ふるってご応募下さい。また、前回の開催から幹事も大きく入れ替わりましたので、中部支部の皆様のご助力が必須です！どうぞよろしくお願いたします。

2023 年度の中部支部役員

支部長：星野 幸代
代表幹事：松本 三枝子
事務局長：杉浦 清文
ニューズレター編集：中村 晴香
HP 管理：若松 伸哉
会計監査：林 久博

幹事：岩田 和男	尹 苙汐	工藤 貴正	香ノ木 隆臣
小松 史生子	杉浦 清文	中村 晴香	林 正子
平林 美都子	星野 幸代	松本 三枝子	メベッド シェリフ
森 有礼	若松 伸哉		

※支部運営についてのご意見やご提案など、役員の誰にでもお気軽にご連絡下さい。研究発表のお申し込みも随時受け付けております。また、みなさまのご意見・ご連絡等をコンスタントに集約するため、メールでの連絡窓口も設けています。hikaku-chubu@googlegroups.com をご利用下さい。

事務局からのお願い

■ご異動、お引越などに伴う登録情報の変更について：

ご異動、お引越などに伴う登録情報の変更がありましたら、速やかに本部事務局長 森岡卓司先生(moriokatakashijcla@gmail.com)、及び下記中部支部事務局にご連絡下さい。近年、本部で作成する名簿が支部へ送付されなくなり、照合や修正に手間取ることが多くなっています。ご面倒ですが、本部と支部の両方へご連絡下さいますよう、どうぞ宜しくお願いいたします。

日本比較文学会中部支部ニューズレター第 30 号 2023 年 5 月 2 日発行

発行人：星野 幸代
編集担当：中村 晴香
発行：日本比較文学会 中部支部
事務局：〒466-0815
愛知県名古屋市昭和区山手通 5 丁目 31-2
アネックス 中京大学国際学部
杉浦 清文 研究室
TEL：052-835-7392
E-mail：ksugiura@lets.chukyo-u.ac.jp